

黒滝村

～未来につなぐ新しい村づくりを目指して～

奈良県のほぼ中央に位置し「奈良県のへそ」を呼ばれる黒滝村は、豊かな自然が良質な杉や桧を育み、林業を基盤産業とする「森の村」として発展してきた。しかし、近年林業が衰退する中、少子高齢化、過疎化に歯止めがかからず、村の将来に向けての社会問題が山積している。そういった中、村は「未来につなぐ村づくり」を目指し、村民が主役となって各種施策に取り組んでおり、各分野においてその成果が表れている。以下に黒滝村での取組みの一部について紹介します。

I 概要

1. 地理・歴史

奈良県のほぼ中央に位置し、「奈良のへそ」と呼ばれる黒滝村は、平均標高 490m、東西 12km、南北 10km、面積 47.70km²、人口 660 人の山村で

黒滝村の位置図



ある。村域の 97% が林野で河川沿いのわずかな平野や山麓斜面に民家が点在している。

1889 年、町村制施行に伴い誕生した南芳野村が 1912 年に黒滝村と丹生村に分村。その後、1949 年に大字才谷が下市町に編入されて

12 の大字になり、現在に至っている。

2. 産業構造

「従業地による就業者人口（15 歳以上）」の産業別割合は、第 1 次産業が 12.3%、第 2 次産業が 22.2%、第 3 次産業が 65.5% と、奈良県全体（順に 3.4%、22.2%、74.4%）に比べ第 1 次産業の割合が高く、第 3 次産業の割合が低い（総務省「国勢調査従業地・通学地による人口・就業状態等集計」（2015 年））。

産業構造を、「経済センサス基礎調査」（2014

年）ベースでの就業者比率の特化係数*でみると、「林業」（47.2）、「木材・木製品製造業（家具を除く）」（40.1）、「宿泊業」（10.2）の順となっており、「林業」と「木材・木製品製造業」が突出して高い。

*特化係数は、地域のある産業がどれだけ特化しているかをみる係数。1 以上であれば特化していると考えられ、数値が大きいほど特化度合いが高い。

3. 人口構造

1947 年には 3,819 人だった総人口は、それ以降減少の一途を辿り、1960 年には 3,000 人を割った。その後も減少は続き 2015 年には 660 人となっている。また、将来的には 2052 年には 326 人になると予想されている。年少人口（0～14 歳）は 5.0%、生産年齢人口（15～64 歳）は 45.6% であり、高齢人口（65 歳以上）は 49.4% とほぼ半数を占める（総務省「国勢調査人口等基本集計」（2015 年））。

II 村の将来像を見据えた各種施策の取組み

黒滝村は、豊かな自然が良質な杉や桧を育み、林業を基盤産業とする「森の村」として発展してきた。しかしながら、近年林業が衰退する中、少子高齢化、過疎化に歯止めがかからず、社会問題が山積している。

こういった状況の下、村は「未来につなぐ新しい村づくり」をスローガンにして村民が主役となる村づくりを推進。林業をはじめとする産業振興の充実、新しい産業の創出と雇用対策への取り組

み、移住定住の促進等に努めている。また、少子高齢化に対応するべく、教育支援と子どもの安全対策、高齢者の健康づくりにも取り組んでいる。

1. 林業の振興

全国的に林業の不振が続くなか、同村では今後は後継者の育成や林道・作業道の整備といった林業基盤の強化を図るとともに、新たな森林活用や木材利用を推進する必要がある。

林業基盤の強化策としては、林業への就業希望者に対し必要な専門的技能・技術を習得させる実地研修等を実施して林業労働力の確保・育成を図っている。

新たな木材の利用策としては、2016年2月に、吉野杉の安定供給、販路開拓等の事業を強化することを目的として、黒滝村、黒滝村森林組合、岐阜県の家具メーカーの3者により連携事業の協定が締結された。優れた圧縮技術を保有する家具メーカーと連携することにより、同村から産出される吉野杉を活用した「黒滝ブランド」の家具づくりが進められる。また、さらなる地域木材の可能性を追求し、特注物件や内装材、建築材などにも取り組んでいる。



3者提携事業
による製品

2. 食の6次産業化

過疎化、高齢化が進む中、農業の担い手不足が深刻化して遊休農地、荒廃農地が増えており、農家の所得確保、雇用の創出が今後の課題となっていた。

そこで、「黒滝村産業活性化委員会」を立ち上げて新たな産業活性化策の検討を重ね、農産物の加工品の調査、研究を進めてきた。その結果、大

和の伝統野菜である「黒滝白きゅうり」(*)を中心にした農作物で、生産・加工・販売の「6次産業化」を推し進めていくことが今後の産業活性化につながるとの結論に至った。

2016年度、村民などで構成する「食の6次産業化プロジェクトチーム」を立ち上げ、「黒滝白きゅうり」を活用した新たな商品開発に向け、新商品の開発、研究に取り組んだ。空き校舎となった旧中学校を改築し、加工所、研究室等の施設を今年度整備する。

2017年度からは村民8人で組織される「ねえのごっつお」(年長の女性がつくるごちそうの意味)が事業を引き継いだ。なお、白きゅうりの加工品は道の駅「吉野路 黒滝」や村外の農産物直売所等で販売されている。

(*) 外観は果実全体が白色。皮が薄くてえぐみがない。黒滝村では35軒の農家が栽培している。



黒滝白きゅうりと
その加工品

3. 観光の振興等

(1) 黒滝・森物語村

村では産業分野だけでなく観光分野においても森林が活用されている。村内にはキャンプ場やアウトドア系の施設があり、夏期のシーズンを中心にオートキャンプなどで賑わう。

黒滝川のほとりに広がる「黒滝・森物語村」は、「豊かな黒滝の自然」を村おこしのキーワードに1997年にオープンした総合リゾート施設であり、広大な自然の中に、「遊ぶ」「食べる」「和む」をテーマにした施設が揃っている。

「黒滝・森物語村」の宿泊施設「森の交流館」は諸般の事情により一時休業していたが、ホテル再生に実績のある村出身者を総支配人に迎え、2016年4月、1年2カ月ぶりに営業を再開。より

魅力ある施設づくりに向けて関係者が一丸となって動き始めた。

豊かな自然を満喫する体験プランや地元産の食材を使った食事メニュー、送迎マイクロバスの運行など新しいアイデアを次々と生み出し、これまでに、地元野菜収穫やあまごつかみ取り体験、こんにゃくづくり等のプランが好調。再開後売上は順調に増加しており、既に黒字経営にも転換している。



森の交流館の外観と客室の様子

(2) 道の駅「吉野路 黒滝」

黒滝村の玄関口に建つ道の駅「吉野路 黒滝」は北欧の民家をイメージした赤い屋根が目印。観光情報を発信する案内所と休憩所を兼ねている。2016年5月にはレストランを改装したスペースに「黒滝・森物語村」が運営する製パンチェーン系のコンビニエンスストアがオープンし、連日にぎわいを見せている。観光客だけでなく、周辺住民の利用も多く、同店舗形態のコンビニエンスストアの中では全国上位の売上を誇る。



外観とコンビニエンスストア

また、2018年1月には、村のコミュニティバスと路線バスの乗り継ぎ場としての役割を果たしているとして、2017年度モデル道の駅7か所のひとつに認定された。

4. 移住・定住

都市部や県内からの移住・定住（I・J・Uターン）に際しては、「住まい」の確保が必要であるが、さらには、黒滝村の情報を積極的に発信することや、空き家等を有効に活用できる仕組みを構築することが移住・定住の促進には必要である。

なお、村が実施している具体的な支援は以下の通り。

(1) 若者定住促進のための移住定住支援金

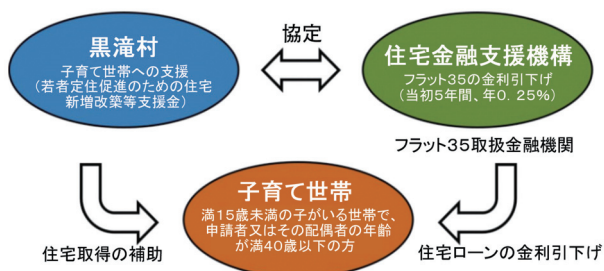
世帯主または配偶者の年齢が40歳以下で、15歳未満の子どもがいる世帯を対象に、村内で住宅を新增改築、空き家を取得または賃借した際に交付する。

移住定住支援金	
●住宅新增改築支援金	・新築工事費1,000万円以上で200万円、増改築費用300万円以上で100万円を交付（10年間対象家屋に居住すること）
●空き家取得支援金	・取得価格の2分の1以内の額で、200万円を限度として交付 ・敷地と併せて購入した場合も対象（10年間対象家屋に居住すること）
●空き家賃貸借支援金	・賃貸人と賃借人に、1年につき12万円を5年間交付（5年間対象家屋に居住すること）

(2) 住宅ローンの金利優遇措置

2017年10月3日、黒滝村は独立行政法人住宅金融支援機構と「子育て支援型及び若者定住促進のための住宅新增改築等支援金事業に係る相互協力に関する協定」を締結した。

これにより、上記「若者定住促進のための住宅新增改築等支援金」を利用して村内に住宅を取得する場合、住宅ローン「フラット35」の借入金利を当初5年間、年0.25%引き下げる。これにより、人口減少に歯止めをかけ、移住・定住の支援を進める。



(3) 教育関連費用の無料化

若者移住定住支援事業に重点を置き、幼児教育及び学校教育支援にも取り組んでいる。2012年度から若者移住定住支援事業の一環として、幼児教育及び学校教育に特に力点を置いている。村内にあるこども園、小学校、中学校の給食費、修学旅行費、遠足費及び社会見学費の無料化を実施済。ふるさと応援基金を活用してスクールバス購入の予算も計上。こども園幼稚園部の保育料も無料化している。

5. その他

(1) 黒滝村元気ふれあい活動奨励制度

黒滝村元気ふれあい活動奨励制度（対象：60歳以上の村民または障害者手帳等を持つ村民）は、村民が健康で、地域において元気にふれあい活動ができるよう後押しする制度。地域の活動に参加する者が年々減少していく中で、村民が取り組む様々な生きがいづくり、健康づくりを「元気ふれあい活動ポイント」として貯めることができ、貯めたポイントは50ポイント単位で500円の地域商品券に交換できる。

例えば、集団健（検）診の受診や白きゅうり品評会への出展など重点枠事業は1参加あたり20ポイント、サロン活動や公民館教室への参加など通常事業は同2ポイントが付与される。



(2) 地域おこし協力隊

村では、「村外の若者」という新たな視点で村の課題を見つめ、地域の人々と力を合わせて地域作り活動に取り組むことを目的として、地域おこし協力隊（※）を2016年から採用。観光振興業で2名、農業の6次産業化で1名が活動している。また、歴史ある吉野林業を新たな視点で見つめ、地域の人々と力を合わせて森林資源を活かした活動に取り組むことを目的として、森林組合にて森林整備隊員3名が活動している。

いずれの分野においても隊員は重要なポジションで力を発揮している。

（※）地域おこし協力隊とは、人口減少や高齢化等の進行が著しい地域において、意欲ある都市住民のニーズに応えながら、地域外の人材を積極的に誘致し、その定住・定着を図ることで、地域力の維持・強化を図っていくことを目的とする国の取組み。

(3) くろたん

2012年7月に黒滝村の村制100周年を記念して誕生した「くろたん」は、村の特産品でもあるイノシシをイメージしたマスコットキャラクター。

くろたんは、村まつりや物産展に参加するほか、道の駅など村内の観光施設を散歩して回り、村のPR活動を精力的に行っている。



黒滝村では、行政、村民、地域おこし協力隊員などが一丸となって取組み、基幹産業の衰退、高齢化、人口減少といった村が抱える社会問題に正面から立ち向かっている。

一連の取組みは、既に各分野において着実な成果を上げており、今後もさらなる発展が期待できよう。

（丸尾尚史、中南知也）